

## [初公開品の紹介]

## 細田栄之筆「美人図」

絹本着色 111.8cm×38.3cm

当館では今回の「江戸時代の絵画」展において、細田栄之筆『美人図』を初めて公開します。この絵は以前から大和文華館の所蔵品でしたが、研究の結果、すぐれた作品に間違いのないことがはっきりしましたので、ここに陳列されることになりました。

この図は左手に短冊を持ち、少し反り身になって立つ一人の美人を表わしています。美人の小袖は赤地に白の桜と金の蜘蛛の巣の模様で、帯は緑色です。打掛は白地で裾が薄茶のぼかしになっており、裾には金泥で萩が表わされています。落款は向って右下部にあり、「治部卿栄之藤原時富筆」と読めます。艶麗なうちにも清楚な美人図で、いかにも武家出身の浮世絵師栄之にふさわしい作品と申せましょう。

細田栄之（1756～1829）は名を時富、俗称民之丞、弥三郎と言い、この絵の落款にあるように、正式には藤原治部卿時富と称しています。幕府御勘定奉行細田丹波守三世の裔で、時行の長男でした。幼少から画を好み、狩野栄川院典信に師事して、はじめ狩野派の画を正式に勉強しました。彼は安永元年（1772）に家督を継ぎ、天明元年（1781）4月御小納戸役となり、同年12月布衣（ほい）を着ることを許されました。天明3年（1783）2月、江戸城西丸の御小納戸役となり、同年12月辞して寄合となり、寛政元年（1789）家督を嗣子時豊に譲って隠居しました。なくなったのは文政12年（1829）7月2日で、74歳でした。

栄之は家禄500石の立派な旗本で、その絵画的教養も武人らしく最初は狩野派の画でした。彼は御小納戸役を勤めていたころ、將軍徳川家治の画のお相手をしてお覚えめでたく、栄之の号も上意によ

って付けたと言われていました。しかし、江戸時代後期の才能ある画人の例にもれず、栄之は次第に粉本（絵手本）を写して制作する狩野派の画に不満を感じるようになりました。そして彼の眼は生動する現実の風俗へ向けられ、当時全盛を迎えていた浮世絵に関心を移すようになりました。

彼が浮世絵を学んだのは、初代鳥居清信の門下鳥居文童齋からで、栄之の浮世絵師としての号を鳥文齋と言うのも、師の姓名にちなむものと言われています。彼が浮世絵に筆を染めたのは、武家としての公職に就いていたころからで、天明5年（1785）刊の黄表紙『其由来光徳寺門』（四谷牛後作）の挿絵が初作だと言われていますが、その刊行年については疑問説もあります。しかし、天明7年（1787）刊『三千歳成云蛭蛇』（みちとせになるちようわびみ、山東京伝作）、翌年刊の『齡長尺桃色寿玉』（甲亀作）や『怪談四更鐘』（唐来山人作）の黄表紙挿絵があり、天明年間と考えられる錦絵の作品も多く認められるところから、栄之は隠居以前からすでに相当量の浮世絵を作画し、刊行していたことは明らかです。

彼の浮世絵は初期には紅嫌い（紅色を省いた黒っぽい調子の錦絵）に佳品が多くあり、鳥居清長の強い影響を受けています。しかし、隠居後の寛政年間（1789～1801）に入ると次第に栄之独特の典雅な美人画を工夫し、12頭身とも言える長身の婦女を描いて、喜多川歌麿にさえ影響を与えています。彼は門弟も多数育成し、同時代の歌麿に対して、浮世絵美人画に別の一派を形成し腕を競いました。

寛政12年（1800）妙法院宮関東御下向の際、命を受けて栄之は隅田川の風景を描いて献上しました。



全図



顔の部分



款印

それは宮の御感を賜わり、帰洛後、後桜町上皇の勅覧に供せられ、御気に召されて仙洞御所の御文庫に収められました。栄之は以後、「天覧」の印を用いてその名誉を記念したと言われます。

栄之の作風は清らかで艶っぽく、高雅です。そこには清らかに澄んだところが認められ、肉感的な艶美さは余り感じられません。その点が彼の同時代の清長とも歌麿ともちがうところで、高い地位の武家出身という彼の人柄が出たと言えましょう。しかし、こういう上品さは栄之の芸術の価値を下げるものではなく、浮世絵派の中に清涼な気分を漂わせています。

栄之の錦絵のうち特にすぐれているのは、天明末から寛政初めにかけての間の作品で、『風流七小町』（天明8年・1788）、『六歌仙』（天明8年ごろ）、『青楼美人六花仙』（寛

政6～7年ごろ・1794～95ごろ）などの揃い物が知られています。また三枚続き、五枚続きの続き物にもすぐれたものがあります。

版画と同じく、栄之は肉筆画にもすぐれた手腕を示し、清楚な画趣を感じさせる作品を残しています。ことに寛政10年（1798）ごろからは栄之は錦絵をやめ、専ら肉筆画のみを描いたようです。彼は若いときに狩野派の修業をしっかりやっただけに、他の浮世絵師よりも肉筆に手馴れています。今回ご紹介した『美人図』は彼の晩年円熟期の作と考えられますが、美人が長身であるところと言い、姿態や表情に気品があるところと言い、あるいは色彩が華麗でしかも清楚であるところと言い、栄之の芸術をよく代表しています。

（成瀬不二雄）

季刊 美のたより No.78

昭和62年 2月19日

発行 大和文華館